

付
録

民俗学研究所第二八回公開講演会

日時 平成二八年七月一五日（金）午後二時五〇分～午後四時二〇分

会場 近畿大学EキャンパスA館 三〇四教室

講師 成城大学教授・民俗学研究所長 松崎憲三氏

演題 縁結び・縁切り習俗の現在

※参加者は、教員・大学院生・学生など、約四〇名であった。



縁結び・縁切り習俗の現在（講演要旨）

松崎 憲 三

はじめに

民俗学には歴史的関心に基づく方法と、現在の関心に基づく方法との二つがあり、前者は歴史的世界を認識するために現代の民俗を調査、研究対象とし、後者は現在を理解する前提として歴史的世界の把握を不可欠なものとしている。すなわち、どちらも過去と現在との対話を前提としており、それが民俗学の特徴にほかならない。筆者自身は双方に関心を持っているが、歴史の変遷を踏まえて現状を把握し、研究上の課題、あるいは民俗を支えている人々が抱えている課題と取り組むべく努めている。なお、筆者の主たる専門領域は民俗信仰論であり、近大民俗も成城民俗も実証的なスタンスをとっているという状況に鑑みて、標題のようなテーマで報告することにした次第である。

さて、晩婚化が進む昨今であるが、それ故にこそなのか縁結びの願掛けが盛んに行われている。関東周辺ではパワースポット巡りが目立ち、週末になると縁結びにご利益のある神社は女性で長蛇の列という。その最たるものが東京都千代田区飯田橋にある東京大神宮（旧日比谷大神宮）である。こうした縁結びの願掛けがあれば、他方では男女の縁を切りたい、数多のしがらみを断ちたいという縁切りの願掛けもあり、こちらも負けず劣らず盛んである。

一、縁結びをめぐる

今日結婚式場で行われる儀礼はキリスト教式が多いようだが、一頃まではほとんどが神前結婚式であった。ただし、日本の伝統文化のように考えられている神前結婚式であるが、実際はそう古くから存在したものではなく、明治三三年（一九〇〇）に嘉仁皇太子（後の大正天皇）の成婚に際して設定されたもので、それ以前は仲人や親族、地域社会の人々の前で行う人前結婚にほかならなかった。皇太子の婚儀は参列者をはじめ民間にも多大な関心を取りびおこした。この結婚式に基づき、日比谷大神宮（後の東京大神宮）の奉斎会が会の事業として神前結婚式を取り込み、翌年以降民間でも行われるようになった。こうした由緒に基づき、東京大神宮はパワースポット巡りの対象として注目を集めているのである。

縁結びとの関連でもう一つ取り上げておきたいのは、未婚の死者の供養として行われる死霊結婚である。生を全うしえず、通常のライフコースから外れた夭折者、事故死者等には慰霊のため特異な儀礼が施される。未婚の死者も一人前と見なされず、しかも無縁仏として災厄を及ぼしかねない存在と考えられ、遺族が死者をして結婚せしむる死霊結婚が沖縄や東北地方でおこなわれてきたし、現在でも盛んな習俗の一つである。

青森県下のそれは、花嫁・花婿人形に死者の写真を添えて霊山や寺院に奉納するというもので、イタコ等の呪術宗教的職能者が関与するものであった。一方山形県下では、山形市・立石寺や天童市・若松寺等を中心とする村山地方に見られる習俗で、ムカサリ絵馬を奉納するというものである。ちなみに「ムカサリ」とは迎えられの方言で、祝言を意味する。最も古いムカサリ絵馬は明治二八（一八九五）のもので、近代以降の習俗であるが、ここでもやはりオナカマと呼ばれる呪術宗教的職能者がかかわっていた。さらには儀礼を実施する僧侶、ムカサリ絵馬の絵師、この三者によって死霊結婚は維持されてきた。その図柄は、床の間に掛け軸を掲げ、松の盆栽を置いたような祝言の座敷に、花嫁・花婿を挟んで二組の仲人が並び、譜面台を前に差配人が謡を唄い、彼の指示で男蝶・女蝶

が三々九度の杯に酒を注ぐというもので、これが古くからある様式である。ところが徐々に簡略化され、今では花嫁・花婿二人立ちの記念写真風のものほとんどである。そうして近年は絵師に頼まずパステル画風の自分で書くものが多くなり、呪術宗教的職能者が介在することもなくなった。ムカサリ絵馬奉納習俗は、そうすることによって未婚の死者を結婚した体にして一人前として見なし、祖霊化コースにのせることによって慰霊に努めると共に、災厄のふりかかるとを防ぐものにほかならなかった。しかし今日のそれは、こういうものがあるならあの子のために奉納してあげたいと、我が子に対する親や友達のいとおしみや哀れみの気持から奉納するケースがほとんどである。このように形態やその持つ意味に変化はあれ、衰える気配はない。

以上、縁結びを目的としたパワースポット巡りと死霊結婚というあの世での縁結びを紹介したが、以下民俗学徒によく知られている三箇所の事例を取り上げ、縁切り習俗の歴史的变化と現状について報告する。

二、板橋区・縁切榎

平成元年（一九八九）に刊行された『いたばし郷土史辞典』の「縁切榎」の項には

(a) 榎と樺（ツキ）が双生していたのでエンツキと呼ばれ、縁が尽きるといふ俗信が生まれた。

(b) 離別を望む妻は縁の切れることを願い、密かに樹皮をお茶などに混ぜて夫に飲ませたという。

(c) 富士講の行者・伊藤身縁はここで妻子と別れ、入定のため富士に向かったという。

(d) 宮家の息女五十宮いそのみや楽ささの宮が將軍家降嫁の際には縁切榎を避けて通り、皇女和宮の降嫁の折には榎を根本から枝まで掘で包んで隠したと言われる。

とある。(a)と(d)については柳田國男も「争いの樹と榎」神樹篇（『定本柳田國男集』一一卷）の中で言及している。(c)については省略。(b)については近世の川柳に「板橋の木皮の能は医者に洩れ」と歌われ、さら

に十方庵の『遊歴雜記』(文化一〇年)にも記されている。元来は、木皮を相手に煎じて飲ませ、満願に際して小絵馬を奉納するというものであった。ところが現在では、そんなまだらつこしい手順は省略して、祈願をする時に小絵馬を奉納するように変化した。ちなみに祈願内容は、近世後期においては男女の縁切りか酒との縁切りに限られていたが、今日では世相を反映して、大嫌いな夫婦やサークル仲間というのも見られ、病氣や貧困、トラブル、不登校との絶縁などが加わって、多様な様相が見て取れる。それに対応する形で絵馬の図柄も、榎を真中に男女が背中合わせに立つ形から、榎の切株に注連縄を張り巡らし、「善縁をむすび悪縁をたつ」と朱書きされたものに変化している。祈願内容の多様化に応じて、より汎用性のある図柄に切り替えたのである。こうして宗教施設側もそれなりの努力をしているのである。

三、足利市・門田稲荷

門田稲荷については、大正三年(一九一四)の丸山太一郎による「八幡村の縁切稲荷」(『郷土研究』二一一)なる小論文が初出である。明治四五年(一九一二)に字宮前にあつた小祠が合祀されたもので、本名の門田稲荷より縁切り稲荷の名で知られ、しかも本社より身入りが大きいと報告している。本社よりも末社の方が名を馳せているといえ、広田神社の西宮戎を彷彿させるが、大正期にはそれなりに知られ、男女の縁切りに限らず、当時から多様な縁切りに効験があつたようである。

しかしより有名になったのは、女性雑誌や新聞等に取り上げられた平成以降である。平成六年(一九九四)九月二九日付夕刊フジ「嫁姑・離婚・不倫・親戚」なる記事や、同六年一月一八日付東京新聞「いじめ地獄…僕を助けて『縁切の神様』足利門田稲荷」等が主だったものである。これらの記事に接して早速翌年足利へ出向いた。朱の鳥居をいくつもくぐって社殿に辿り着くと、絵馬懸が一棟あつて表側に木製の底抜け柄杓が多数吊るされている

だけであつた。ところが裏側に回つて我が目を疑つてしまった。藁人形に写真を添えて、釘を刺してあるものが多数見かけられた。実名を書いて「死ね」と書いてあるものも存在した。一方小絵馬の願文もすさまじいものであつた。葛藤や憤りが昂じてくると怨念となつて発露するのかと空恐ろしくなつてしまった。

それからしばらく経つて、平成二二年（二〇一〇）に院生を連れ総勢十数名で出向いてみた。ところが絵馬懸の様相が一変しており、藁人形や写真の類は消え、底抜け柄杓も古いものが散見される程度であつた。宮司の代替わりも一つの要因だが、もう一つの要因は足利市の町おこしの一環に組み込まれたことにある。足利市では「ひめたままちなかスタンプラリー&肩車フェスタ」なるイベントが行われるようになり、織姫神社の祭神をイメージした「はたがみ・おりひめ」と、門田稲荷をイメージした「かどた・みたま」が足利支援マスコットとして活用されるに至つた。今日のユルキャラブームともかわるが、それによつておぞましさを取り去つてしまつたのである。民俗の観光資源化に伴う変化といえるが、願文の方のすさまじさは増す一方である。

四、福岡市・野芥縁切地蔵尊

野芥縁切地蔵尊については、『筑前國読風土記拾遺』や『福岡県町村誌』等近世後期から近代初頭の地誌類に記載されており、比較的古くから知られていた。長者の娘で嫁入り途中、相手の長者の息子が頓死（あるいは出奔）したと知らされ、もはや行くべき所がないと自害する。その時「自分を祀れば、同じような不幸な目に会つてゐる人々をお守りする」と遺言を残して祀られるに至つたとの由緒を持つ。近世において典型的な、救済志向型霊神信仰に属する。

この場合も、願掛けに際して地蔵の石を削り取り、煎じて相手に飲ませ、満願時に男女背中合わせの小絵馬を奉納するというものであつた。ところが板橋区の縁切榎同様、削つた石を相手に飲ますようなことはもうしていな

い。絵馬の図柄に変化はないものの、祈願内容は他地域同様多様化している。しかも小絵馬に願いを託すというよりも願文を封筒にしたためて奉納するようになり、小絵馬の数よりこちらの方が圧倒的に多い。中には切手が貼つてある投函されたと思しきものも見受けられる。

結びにかえて

今日のスピリチュアルブームと関連してか、縁結びの祈願を目的としたパワースポット巡りが盛んである。一方ではあの世の縁結び（死霊結婚）なるものも存在し、時代に即応しつつ息づいている。

また縁切り習俗については、今回報告した三者は願掛けの対象も縁起も様々であるが、その歴史は文献上近世中期を遡ることはできない。榎の木皮や石像を削り取って飲ませ、満願時に男女背中合せの小絵馬を奉納する形から、祈願に際して小絵馬を奉納するというスピーディな世に対応した形となり、祈願内容も世相を反映して多様化した。それと伴に小絵馬の図柄も汎用性のあるものになっていった。一方では、図柄に願いを託す形から、願文（文字）に力点を置くものへと移り変わり今日に至っている。

参考文献

- 長沢利明 一九九六 『江戸東京の庶民信仰』 三弥井書店。
- 穂積恵子 一九八九 『総合結婚式場の誕生』『都市民俗学へのいざないⅡ・情念と宇宙』雄山閣。
- 松崎憲三 二〇〇四 『現代供養論考くヒト・モノ・動植物の慰霊』慶友社。
- 松崎憲三 二〇一四 『縁切り習俗の現在』『日本常民文化紀要』三一輯 成城大學大学院文學研究科。